
にゃんこ先生にお願い！

青井ハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃんこ先生にお願い！

【Nコード】

N2196F

【作者名】

青井ハナ

【あらすじ】

―それはいつも「突然」やって来る。私が望もうが望むまいが。
―小心者で悩みの絶えない私と、マイペースで弾けたにゃんこ先生。
そんな二人のお茶目で笑えてちょっぴり泣ける、そんな秘密の日々を綴った物語。

プロローグ（前書き）

連載形式です。

主人公とにゃんこ先生の秘密のストーリーをどうぞ楽しんで下さい。
恋愛相談、人生相談、今夜の晩ご飯相談まで何でもあります。
更新はのんびりになりそうですが、お付き合い頂ければ幸いです。

ブログ

その時はいつも突然やってくる。

私がそうなってほしいと心から願う時、その「突然」はやって来ない。

・・・ことが多い。

私が特に望んでいない時、その「突然」はまさに突然やって来る。

そのタイミングに私は、つくづくこの世は自分のために回っているわけではない、ということを感じさせられる。

その「突然」の秘密は、私と彼女しか知らない。

永遠に続くのか、いつかプツリと終わってしまうのかは分からない。

それでも。

私はその「突然」を今はただ信じていたい。

いつか終りが来るその時まで・・・。

第1章：高校時代 1話：にゃんこ先生現る

夕暮れ迫る校舎の一角。

2年7組の教室の窓側の席で、私は頬杖をつきながら校庭を見つめている。

その視線の先には彼がいる。

今日は彼の所属するサッカー部は練習のない日だ。

それでも彼はただ一人、黙々と校庭を走っている。

そんな彼から私は目が離せなかった。

今日こそは声をかけたい。

勇気を出して。

一週間前も一人きりで彼を待つことに成功したのだが、声をかけることは出来なかった。

だから今日こそは。

とその時、彼が走るのを止めて校舎の方へ戻って来るのが見えた。

私は慌ててガタンと立ち上がり、とっくに帰り支度の済んでいる鞆をひったくるように

抱えると、教室のある二階から玄関に向かってゆつくりと歩き始めた。

計算通り、彼はちょうど私が階段を降りている時に、水色のタオルで汗を拭きながら階

段を登って来た。

その姿を認めた途端、私の心臓はバクバクと激しく踊りだした。

両手は汗をかきまくっているくせに氷のように冷たい。

―お疲れ様、いつも頑張ってるね。―

何度も何度も練習した言葉を、早口で頭の中で3回唱える。

よし、言える。大丈夫。

彼が、階段を降りてくる私の存在に気が付いた。

私はたった今彼の存在に気が付いたかのようなふりを装って、「あ」と声にならない様

な声でつぶやく。

どんどん彼との距離が近づく。

あと5メートル。

3メートル。

1メートル。

- 1メートル。

- 3メートル。

- 5メートル。

・・・。

まただめだ・・・。

だめ、なんにも言えない。

まともに顔を見ることがすら出来なかった。

彼の存在を背後に感じながら、私はがつくりと肩を落とした。

恐る恐る階段の上を見上げてみると、彼はもう踊り場を折り返して二階に向かう階段を

登っている。

私は視線を自分の足先に戻すと、はあ、と深い溜め息をついた。

情けない。こんな自分、情けなさすぎる。

着替えてからまた降りて来るであろう彼を玄関で待つことも出来るはずだが、偶然が二

回もなんてあまりに不自然だ。

偶然は一回だからこそ堂々と「偶然」と言えるのだ。

その一回の偶然ですら何も出来なかった自分が、わざとらしい二回目の偶然に踏み切る

勇気なんてあるわけなかった。

私はとぼとぼと玄関に着くと靴箱から黒い皮靴を取り出した。

何となく気合いを入れるために今朝ピカピカに磨いてきた。

しかしその気合もむなしく、今の私は何て暗い顔をしているのか。

やけくそでボタンと勢いをつけて靴箱の扉を閉める。

そこには「楠木はるか」と私の名前。

―― くら、くすのきはるか！何をやっているんだ！――

天からの声が聴こえてきそうである。

私はもう一度溜め息をつく、重い足取りで校門に向かった。

「はあゝあ。」

今日何度目か分からない溜め息が、六畳の私の部屋にむなしく消えていく。

部屋中が溜め息の成分でいっぱいになっているみたいだ。

こういうの、恋わずらい、っていうのかな。

だって食欲旺盛なことだけが自慢の私が、夜ご飯もほとんど食べられなかったんだから。

これはもう病気だと思った方がいいかもしれない。

ベットの上で右を向いたり左を向いたり、枕に顔をうずめたりと落ち着かない。

今日の自分が情けなくて溜め息が出るくせに、彼と話をする自分を夢見て胸がドキドキ

と高鳴って、素敵な明日を期待してみたり。

そんなことを考えて私の表情はくると変わるが、最終的には暗い顔に戻って溜め息

をつく。

ここに戻ってきてしまふのだった。

「おい。」

うつぶせになって枕に顔を押し付けて悶絶していると、私の耳にかすかな声が聴こえた。

私はぎよっとした。

やばい、何これ。色々考え過ぎて頭おかしくなったかも。

「おいっ。」

もう一度、さっきよりやや強い口調でその声が聴こえた。

おばさんみたいなしゃがれ声。

何これ。まじでやばくない？

私は固まってしまった。恐ろしくて顔を上げることが出来ない。

私、靈感とか無いんですけど・・・。

てゆうか、今まで無いと思ってただけで、実はあったのかも？

お母さん！お父さん！って叫びたいのに声が全く出ない。

ただ石のように固まっているだけだ。

「おいつて。霊とかじゃないから。あたし、あたしだよ。」

え、あたしって誰・・・。

あ。これってもしやちまたで噂のオレオレ詐欺？

もしかしてこの手口、すでに霊界にまで広がっちゃってるわけ？？

おれおれ、とか言っつて人間を安心させといて、見たらバァーみたいな・・・。

その時、背中の上にどすんと何かのかたまりが落ちてきた。

私は心の中で「ヒイツ！」と絶叫した。

何これ何これ何これー！！！！

するとそのかたまりが言った。

「あたしだよ、はるか。もう忘れちゃった？」

「・・・。」

「ほら、これ覚えてない？この感じ。」

背中を揉むような二つの小さな感触。

ん？

この感じ、すごく懐かしい。何だっけ？

え、もしかしてもしかしてこれは・・・。

私はすごく怖かったけど、何とかそのかたまりを見てみようと思目を開けてゆつくりと

首を回してみた。

すると向こうがひょいっと私の顔をのぞき込むように、その顔を近づけてきた。

その感触に私はまたも「ヒイツ」となったのだが、その感触はなぜ

かひどく懐かしい感じ

がした。

この、耳がくすぐったいような感じ。

ふんふんと湿ったような息。

そしてこの重さと温かさは・・・。

「ま、まさか・・・ブルー??!!」

背中のかたまりはドスンと布団の上に降りると、

「やっと気づいたか！相変わらずにぶいなゝはるかは。シャッシャッシャッ。」

と目を細めてしゃがれ声で笑っている。

ええゝ？これあり得ないんですけど・・・。

ブルーは二年前に享年１６歳でお亡くなりになった、我が楠木家の愛猫だ。

それが今になって突然現れて、シャシャとか笑いながら喋っている。

ええ、やっぱりこれあり得ないんですけど・・・。

第一この声。

ブーははつきり言ってかなりの美猫だった。

これはひいき目ではないと思う。

ブーはロシアンブルーのわりに黒目がちで少し毛がふさふさしていて、もしこの子が人

間だったら絶対女優になってる、と確信するほどめちゃくちゃ美人だったのだ。

それがこの見た目でこのおばさんみたいなしゃがれ声。

なあんかがっかりだな。

なんて言ってる場合じゃなかった！

「ほんとうに、ブー？なのかな？あはは。」

私がまだ信じられずにためらいがちに聞くと、

「まだ疑ってんのかい？」

と彼女はお得意のポーズで脚をピンと伸ばして毛づくろいをしてい

る。

その姿は紛れもなくブーだった！

私は信じられない気持が一転、ものすごく懐かしくて嬉しくて叫びだしたい気持ちに襲

われた。

「ブーーーーー！！！！ほんとにブーだーーーーー！！！！」

と叫ぶと、ブーを抱えあげて潰れんばかりにぎゅうっと抱きしめた。

ブーは突然の抱擁に驚いて、

「ブニャッ」

とブスブス鼻を鳴らしていた。

この日から私とブーの秘密の日々が始まったのだった。

2話：にゃんこ先生朝ごはん

ペシン。

ペ、ペシンッ。

何かが私のほつぺたを叩いている。

でも眠気200%の私はまだまだ夢の中。

ドシッ。

何かが私の胸の上に乗ってきた。

でも眠気180%の私はまだ夢の中。

ムギユウ。

何かが私の顔の方に迫ってきている。どんどん迫ってきている。
でも眠気150%の私はまだ夢の中・・・。

フンフンフン、ブクシュッ！

「つめたっ！！」

突然、顔に水しぶきのようなものがかかり、私は一気に夢から覚めた。

まだぼんやりしてはいたが反射的に目を開けると、目の前に灰色のかたまりと水色のビー玉が・・・。

「ヒイツ！」

とつさに悲鳴のような声が出た。これってホラー？

するとしやがれた声で、

「なんだい、そのシツレイな反応は。」

と、一喝。

あ・・・。私は急激に思い出した。昨夜のブーとの衝撃的な再会を。

「ご、ごめん、ブー。ちょっと寝ぼけてて。」

私はその水色のビー玉をちらっと見ながら、半分おびえたように謝った。

「ふん、相変わらずストボケてんのな。はるかは。シャツシャツ！」

昨日の夜。

私は二年前にお亡くなりになった我が楠木家の愛猫ブーと、奇跡の再会を果たしたのだ。

にわかには信じがたい事態に、当然私はかなりパニックした。

でも、ブーの説明を真に受けるならば、この奇跡の再会にはそれ相応の理由と約束事があるようだった。

理由や、『霊界 この世』の詳しいシステムについてはまだ聞かされていないのだけど、絶対守らなくていけない約束事についてだけは厳しく指導を受けた。

約束その壱： その存在について口外するべからず！

約束その弐： アドバイスは四の五の言わずに受けるべし！

約束その参： 毎日欠かさずエサを与え面倒をみるべし！放置プレイ厳禁。

この三つについて、私は夜中の三時まで、繰り返し繰り返し復唱させられたのだ。

最後の方はもはや夢なのか現実なのかすら判別のつかない朦朧とした状態になり……

そして今の目覚めに至る。

「うん。」

胸の上に乗ったブーを落とさないように、首を少しだけ回して枕もとの時計を見た。

「!」

私は驚いた。まだ朝の五時ではないか。

どうりで部屋の中はまだほの暗い。太陽のお出ましはこれからだよだ。

何だってこんな時間から起こされなくてはならないのだろうか・・・。

私はブーを心の中で恨めしく思った。

しかし口に出しては言えない。

生前のブーは、それはそれは美猫だった。

つやつやとしたグレーの毛並み。

ブルーに透き通ったビー玉のような美しい瞳。

頭脳明晰で理知的であることを誇るようなシュツとしたひげ。

それでいて愛嬌のある表情やポーピングで皆を引き付ける、その天性の愛くるしさ。

家族全員がブーのとりこだったと言っても過言ではない。

当然私だってブーが大好きだったし、死んだ時は悲しくて悲しくてせめてもう一度一緒に寄り添って眠りたい、と願った。

しかし。昨日私は知ってしまったのだ。

ブーのおばさんのようなしゃがれ声を。

ブーのその腹黒さを。

そして人間の歳でいうと私なんかよりも遥かに遥かに年上で、私なんかが太刀打ちできるような存在ではないということ。

というかその年齢、あり得ないですから、という感じだし。人間だったらきっと仙人レベルだ。

というわけで、私はどんなに恨めしく思うことがあっても、今のブーには言わない方が身の為だということをすでにこの数時間で悟ったのだった。

それにしても、寝たのが夜中の三時。
今は五時。

いくらなんでももう少し寝かせてくれないんじゃないか……。

その時。

ぐうつうつうつ

と、胸のあたりに小さく震える音がした。
それはまだ静かな朝ぼらけの私の部屋に、小さく広がり消えていった。

まさかブー……。

私は思い出した。

生前のブーは、毎朝五時に起きる父にエサを与えて貰っていたことを。

嗚呼、無情。

これから私は毎朝五時に起きてブーにエサをあげなくてはいけないのだろうか。

いつそのこと父に話をしてエサをあげて貰えば！

と思いついた私のらんと輝いた目を見て、ブーがギロリと冷やかな一瞥をくれた。

「はるか。約束その言は。」

「ええと、その存在を口外するべからずです。」

なぜか敬語でとつさに答える私。昨日の復唱の成果が出ているじゃない！

と、いうことは、家族にすらブーの存在は話をしてはいけないということなのだろうか。

それは悲しいことだった。

だって、ブーが帰ってきたことを話せば、みんな心から喜ぶことは明らかだった。

父が、母が、どんなにかブーの死を悲しんだことか。どんなにか会いたいと願っていることか。

私はやるせない思いでブーをそつと見ると、ブーも心なしか悲しげな顔をして、伏し目がちに部屋の隅の方を見ていた。

私はブーをそつと抱えてベットの脇に降ろすと、のそのそと起き上がって机の引出しを開けた。

そこには私の大好物の「たけのこの里」が隠されている。

非常食だ。

ブーは決まったエサしか食べない子だったが、私が「たけのこの里」をザラザラと音をさせて振りながら、

「これしかないけど食べる?」

と聞くと、こくんとうなずいて足もとにすり寄って来た。

その姿はさつきまでの偉そうなおばさんではなく、やっぱりただの可愛いにゃんこだった。

かくして、毎朝五時に起きてブーにエサを与える生活が幕を開けたのだった。

あー、朝寝坊の喜びを私にもう一度!!

3話：にゃんこ先生初登校

「・・・か、・・・るかつ。」

「んゝ・・・。むにゃ。」

「・・・るかつ、はるかつ!!」

「わあっ!!」

ガッターン、という大きな音が教室に響き渡った。

突然立ち上がった私に、クラス中のみんなが驚いてこっちを見ている。

先生もポカンと口を開けて私のことを見ている。

・・・やっちゃった。

私はここが二年七組の教室で、現在国語の授業の真っ最中であることを思い出した。

「くすのきゝ、どうした？質問か？」

「いや、はい、あの、すみません・・・。」

しどろもどろになりながら頭を下げ、着席する私。

あー、穴があつたら入りたい。いやホントに。

「シャツシャツシャツ、はるかのまぬけ〜!」

耳元でしゃがれ声が聞こえた。

・・・。

一体誰のせいだと思っているのか。

昨夜ほとんど眠ることができなかった私は、ついつい授業中に眠っていたらしい。

声の主は、二年前にお亡くなりになった愛猫ブー。

昨夜突然私の部屋に現われたのだ。

ブーは朝ごはんに私の非常食である「たけのこの里」をガツガツと食べた後、こんなことを言い出した。

「さてと。あたしが入るのにちょうどいいものはないかしらねえ。」

「は?」

そのセリフの意味が理解できなかった私は、口を半開きにしてブルーを見た。

「あらやだ、すごい間抜けな顔。はるか、女子たるものの口はきちんと閉めているべし。でないととても間抜けな子に見えるわよ。シヤツシヤツ！」

余計なお世話だ。

ムツとしている私をよそに、ブルーはひょいっとジャンプすると私の机の上に飛び乗った。

ふんふんと鼻を鳴らしながら何やら搜索している。

すると、

「はるか、これがいいと思われるぞ。」

とブルーが何かをくわえた。

それはネコモチーフの飾りがついた髪ゴムだった。

そう言えば最近その髪ゴムはあまり使っていなかった。

可愛くてとっても気に入っていたのだけど、少し子供っぽいかな、
と思い始めて自然と使わなくなっていたのだ。

ブルーは満足げにそれをくわえて持ってくる、ポトツと私の膝に落

とした。

「さあ、はるか。今日から毎日その髪ゴムをつけて登校するべし！」

「えゝ、なんで?？」

「愚問じゃつ。あたしがその中に入ってはるかと一緒に学校に行くからに決まってるでしょ！」

「ええつ?!」

この飾りの中にブーが入るわけ？

それでそれを私がつけて学校に行くことは、日中もずっと一緒
ってこと……。

何だか嬉しいような気持ちがほんのちょびつと。

四六時中あのしゃがれ声で小言やら何やら言われるのはちょっと勘
弁、という気持ちが大半。

しかし私に決定権がないことは、ブーのギロリとした猫目を見れば
一目瞭然である。

私はしぶしぶその髪ゴムを手にとると、肩より少し長くて真っ直ぐ
な髪の毛を、左耳の下あたりで一本にまとめた。

鏡でチェックすると、確かに少し子供っぽい印象ではあったが意外
とまだ似合っていた。

ブーは一人で鏡を見ながらにやにやしている私を下からチラリと見上げると、

突然「ブニャッ!」と叫んで飛び上った!!

「ヒイツ!」

と驚く私の耳元で突然声がした。

「はい、完了」。これであたしははるか今日一日一緒だよ。」

「え?え?」

鏡を見てもどこにもブーの姿は見当たらない。

本当にこの猫の飾りに入っちゃったの?!

「シャッシャッシャッ!」

耳元からブーのしゃがれた笑い声だけが聞こえる・・・。

まあ、一人でこの部屋に置いておくのも色々心配ではあるし。

私は覚悟を決めたのだった。

「でもさ、さっきはびっくりしたよ。はるか突然立ち上がるんだもん!」

と美香。最近パーマをかけたふわふわの髪が、風に揺れている。

「ほんとほんと、まじびっくり。ハゲ先もびっくりしてたし。」

と愛子。体育会系でサバサバした彼女は、スカートの下にジャージを履いてあぐらをかいている。

ちなみにハゲ先とは、さっき私が寝ていた国語の授業の先生のこと。そのまま、禿げているから「ハゲ先」のあだ名で呼ばれている。

ここは学校の中庭。

10月の空は青くて高い。時々吹き抜ける風が涼しくてとても心地よい。

今日は天気がいいからと、美香と愛子と中庭でお昼ご飯を食べることにしたのだ。

「ん、ちよつと昨日寝不足で……。はは。」

とお茶を濁す私に、愛子が目をキラキラと輝かせて聞いてきた。

「もしかして、高田っちとうまくいったとかー??！」

「ええっ?! 愛子、なんで高田君のこと知ってるの?!」

と目を白黒させて、おかずを喉に詰まらせそうになっている私に、美香と愛子は顔を見合せてにやにやしている。

「ねえ、はるか。こちらが気づいてないと思ってた？」

「馬鹿ね。はるかが高田つちのこと気になってることなんて、ずっと前から知ってました！！ね、愛子？」

そう、だったんだ・・・トホホ。

「ほんと鈍いな、シャシャ。」

何故かもう一人勝手に会話に参加している猫がいるが、私は聞こえないふりをした。

「で、どうだったの？ちゃんと話できたの？」

身を乗り出して聞いてくる美香。

「ううん、やっぱりダメだった。緊張しちゃって・・・。」

私の返答に、二人とも「あ」とじれったそうに身をよじっている。

「本当ははるかが相談してくれるまで待とう、って言ってただけど、もう黙っていられないよ！だってはるか、全然動かないんだもん。そんなんじゃない？いつまで経っても高田君はるかのかの気持ちに気付いてくれないよ？だいたいクラスだって違うんだからさ。」

「そうそう、昨日はせっかく気を利かして先に帰ったのに進展ないんだもん。」

そうなのだ。

私の想い人は高田君といって、二年一組で私とはクラスが違う。

だから私の方から積極的に動かないことには、話すきっかけすら何ひとつないのだ。

でも、もし高田君が同じクラスだったら今日の私の醜態を見られちゃうところだったから、違うクラスで良かったのかも……。

「というわけで、もう知ってることをバラしたからには、私と愛子は全面的にはるか恋をサポートいたします！さてと、ではでは、作戦を練るといきましょうか。」

美香の目がキラキラと輝いている。

愛子は美香より冷静だけど、にやにやしながら「そうだなあ」なんて言っている。

え、ちょっと待って、だって心の準備何も出来てないし。

そんな、作戦なんていいよ！自分で何とかするし……。

てゆうか、こうなるのが嫌で誰にも相談しないでいたのに……。

でも動けない私のためにやる気になってくれている二人に、余計な

ことしないで、とも言えない小心者の私。

私が一人でもじもじしている間に、美香と愛子はどんどん話を進めている。

題して、「校庭でドッキリ 胸キュン放課後作戦」らしい・・・。

ああ、私ホントそういうの無理だから、と断りたいのに言えない。

何だか私よりも二人の方が盛り上がっている。

そんなこんなで、決行は明日の放課後に決まってしまった。

結局私は何も言えないまま、二人に押される形で頷いてしまったわけだ。

作戦会議の間中、ブーのしゃがれ声は一度も聞こえてこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196f/>

にゃんこ先生にお願い！

2010年10月10日05時37分発行